

相手に触れるということばの可能性について —言語の交話機能と冗長性—

丹 木 博 一

ことばの壁

ひとたび言語能力を習得したひとにとって、ことばを用いずに日々を送ることはできない。それはことばを理解し、語る能力を身につけた者の宿命である。もはやわたしたちには、ことばを用いるかどうかを選択する自由はない。私たちはことばの世界の住人として生きるほかないのである。ことばはその意味で、私たちが生きるために不可欠の環境だと言えるが、それは魚にとっての水とは異なる。その証拠に、ひとは何度も、ことばの壁にぶつかる。話を母語に限っても、人前で話すことがひどく難しく感じられることがあり、あるいは相手が語ることばの意味が確定できないのに聞き返すことが許されないように思われることもある。またことばによってはからずとも相手を傷つけ合ってしまったあとで関係修復のためにどのようなことばをかけたらいかが分からないときなど、ことばが壁となって立ちほだかる経験は数知れない。生きるための環境それ自身が生きることを困難にする可能性をはらむ。ことばにはこうした過酷なところがある。

だが、それにもかかわらず、ことばには、ことばにしか発揮することのできない固有の力があることを否定することはできない。ひとを絶望から立ち直らせるのがことばであれば、哀しみを癒し不安を和らげるのもことばである。それでは、おうおうにして壁となって立ちほだかることばが、創造的な機能を発揮してひとに解放をもたらす触れあいを可能にするにはどのような条件が必要なのだろうか。この点について、ささやかな考察を試みてみたい。

ことばの交話機能

ことばの壁というと、未習得の外国語のことが思い浮かぶ。あるいは専門用語の難解さとまどうといったケースを想定することもあろう。しかしことばは、単に未知のメッセージを伝達するための道具ではない。ことばの意味そのものが複層的な襞をなしているがゆえに、言語の壁も一枚岩ではない。ヤコブソンが言うように、「メッセージの中には、伝達を開始したり、延長したり、打ち切ったり、あるいはまた回路が働いているかどうかを確認したりするのに主として役立つものもある。この接触への指向、マリノウスキーの術語を借りれば

交話的機能は、儀礼化したあいさつのおびたしいやり取りや、会話をひきのばすことを唯一の目的とするだらだらした対話などに現れる¹。ことばには、話し相手との関係を形成し育むことを目的とする機能が伴う。実際に交わされることばにおいて、伝達機能と交話的機能とは、混じりあうのである。

その結果、ベイトソンがダブルバインドと表現したパラドキシカルな事態が生じることもありうる。母親が子どもに向かって「こっちにおいで」と言っておきながら、子どもが近づいていくと身体をよじって拒絶し、反対に近づいていかないと、「私の言うことをきいてくれないの」と言って子どもをしかる。このような板挟みの状況においては、子どもは母親の真意を確定できず、安心して身を任せることができなくなってしまう。「これはメタ・コミュニケーション・システムを崩壊させるというのと同じである。あるメッセージがどんな種類のメッセージなのか彼にはもはや分からない²。しかもスターンが述べるように、ことばはカテゴリー性の情報を扱うには理想的なメディアであるが、情動の程度の特徴や「表出の十分さなど、勾配情報を表すアナログシステムを扱うには、とても不都合³」なため、語られたメッセージの方が公的責任を担うことになり、メタ・メッセージとしての勾配情報の方は否認されやすくなる。そのため解釈に迷った子どもは、迷ったことを自らの罪として背負わざるを得なくなるのである。

ことばの交話機能は、内田樹にならって、存在承認の機能と見なすこともできる。「ことばの贈り物をすると、ことばが返ってくる。その往還の中で、自分があるコミュニケーション・ネットワークの中にいるということが実感される。自分の存在が承認され、必要とされていることが分かる。だから、ぼくたちはことばを交わすわけです⁴。言葉を交わす理由は、必ずしも交換すべきメッセージの重要性に由来するわけではない。俵万智は、「何度でも呼ばれておりぬ雨の午後『かーかん』『はあい』『かーかん』『はあい』』という、子どもとのやり取りの情景を歌った自作の短歌を取り上げて、次のように語っている。「これとって何か用事があるわけではない。ただ『かーかん』と呼びたい時期というのがある。で、『はあい』と答えてもらうのが、ただひらすら嬉しい。そして、飽きない。……これは、言葉の力というものを感じる初めての体験かもしれない⁵。大人だって、同じ人と何度もあいさつをかわす。あいさつの言葉には、伝達すべきメッセージはほとんど含まれていない。それでもあいさつを交わしあうのは、ことばにおける他者との触れあいそのものが人間にとって重要な意味を帯びるからである。しかし、その触れあいは、これまでに見てきたように、ときとして命がけの跳躍を要求するものでもある。

1. ローマン・ヤコブソン／川本茂雄監修（1973）：一般言語学，みすず書房，p.191.

2. グレゴリー・ベイトソン／佐藤良明訳（2000）：精神の生態学（改訂第二版），新思案社，p.299

3. D.N. スターン／小此木啓吾・丸田俊彦監訳（1989）：乳児の対人世界 理論編，岩崎学術出版社，p.207.

4. 内田樹（2003）：疲れすぎて眠れぬ夜のために，角川書店，pp.81-82.

5. 俵万智（2013）：ちいさな言葉，岩波現代文庫，p.248

ことばへの跳躍

そもそもことばを習得することそのものが一つの跳躍である。ウィトゲンシュタインが論じたように、ことばがことばであることをことばによって語ることはできない。「私が語っているのはことばです」という発語が意味をもつためには、すでにその音声がことばとして理解されている必要があり、そうだとすれば、その発語そのものは無意味なのである。ことばはことばであると語られてはじめてことばとして理解されるのではなく、それに先立って、ことばはことばとして示されているのでなければならない。「示されうるものは語られえない」⁶。私たちはいつしか、ひとの発する声が単なる音ではなく、それ自身とは別のものを意味することばと化すような世界のうちへと跳躍してしまっているのである。

こうした経緯の謎をかいま見せてくれる作品に、谷川俊太郎の「コカコーラ・レッスン」という前衛的な詩がある。突堤に腰を下ろしていた少年は、海を眺めながら思わず立ち上がってひとりごちる。「彼は『そうか、海は海だってことか』と呟いた。そうしたら、急に笑い出したくなった。『そうさ、これは海なんだよ、海という名前のもじゃなくて海なんだ』」⁷。少年が発見したのは、海という対象があって、それに後から「海」という名前が与えられたわけではないということだ。「海」ということばによって初めて、海は私たちが経験しているような海になるのであり、現実には既にことばによって媒介されてしまっている。しかしそのことをことばによって表現しようとする、どうしても「海は海だ」というトートロジーになってしまい、語っても他人には何も通じない。ことばから身をひきはがして、ことば以前の海に立ち戻ることができるなら、ことば以前とことば以後の比較を通してことばのリアリティを再確認することもできようが、そんなことはできない話である。ことばの外部でさえ、ことばによって初めて措定されるのである。

ことばの否定機能と志向性の再編

私たちはことばがことばである世界へと跳躍し、そのなかで生きている。ことばを用いるとは象徴を操ることである。フロイトは、あるとき、孫が糸巻きで遊んでいる様子に目を見張った。紐のついた糸巻きをベッドの下に投げ込んで、「オーオーオーオ」と叫んだ子どもは、次に紐を引っ張って手元に引き寄せると「ダー」と喜びの声をあげる。これを繰り返すのを見ていたフロイトは、糸巻きは用事がある家にはいない母を代理しており、子どもはそれを操作しながら、さらに「オーオーオーオ（ない）」と「ダー（あ

6. ウィトゲンシュタイン／野矢茂樹訳（2003）：論理哲学論考、岩波文庫、p.53

7. 谷川俊太郎（1980）：コカコーラ・レッスン、思潮社、p.86.

た)」という言葉によって置き換えたのだと解釈した。内海健が指摘するように、「ここで子どもが獲得したのは『ない』ということである。これは言語にしかない。それ以前には、端的に、あるものはあり、ないものはそもそもないのである。『ない』とすらいえない。『ない』という言葉とともに、不在が表象され、経験可能なものとなる。子どもは『ない』という言葉によって、母という根源的な対象がいらないことを表象する。絶対的無を表象世界内部の『無』に変換したのである。そして不在を耐え忍ぶようになる。さらにはフロイトの孫のように、表象の次元で操作し、遊ぶことさえ可能になる。言語の世界では、母だけでなく、すべてのものには否定のしるしが穿たれている。コトバを獲得した時点で、モノの世界からは離陸している。それによって、人は現前性に張り付き翻弄される状態から解放されるのである。だがその陰には、直接的な現前性の喪失というトラウマが残されている。これは言葉を獲得した者の宿命である。原初対象であるはずの母は、言葉を獲得した時には、すでに表象としての母へと変貌している」⁸。ことばは、不在を不在として理解することを可能にする条件であり、感覚や情動の圧迫から距離をとることを許す。その代償として、直接的で十全な経験が失われてしまうというのである。ことばは、対象の在不在を意識化することを可能にするがゆえに、「否定ができる」という他の表現媒体には見られない特徴をも有する。中井久夫が指摘するように、「絵で話をする場合、絵というものは否定を意味することができない。……否定ができるというのが言語第一の有利性である」⁹。

ことばが現前性からの解放をもたらしてくれる点について、中井はさらに、以下のような経験を報告している。「自分の子どもの観察であるが、言語獲得以前には、寝ていてうなされたり何か苦しんでいたりと寝返りを打ったりすることが多かった。ところが、言葉を獲得して、怖い夢を見たとき両親に伝えられるようになると同時に、悪夢の子どもに及ぼす力が格段に減った。REM 期は、生まれたての赤ちゃんが一番多くて、だんだん大人になるに従って減るが、かりに赤ちゃんの頃の REM 期も夢を見ていることとすれば、この夢は言語によって表現されないもので、夢というべきかどうか。『語られない夢を知る方法はない』といえればそれまでであるが、赤ん坊が示す恐怖が成人の悪夢に似たものによるとすれば、それは、言語という共世界への出口がないだけ、実に恐ろしいだろう。言語獲得とともに、夢を言語化することによって単純化し、人に語れるようになる。私の子どもは語れるようになった時からうなされなくなった。……夢だけでなく、強烈な情動でも、子どもたちが『あー、びっくりした』と言い、親が『びっくりしたね』と相槌を打って体験を分かち合うと、ずいぶん子どもが安心する。つまり単純化し、また体験を分かち合うことによって、言語は、幻想や悪夢を減圧し馴化する」¹⁰。ことばには、

8. 内海健 (2012) : さまよえる自己—ポストモダンの精神病理, 筑摩書房, pp.101-102.

9. 中井久夫 (2012) : 「伝える」ことと「伝わる」こと, ちくま学芸文庫, p.134.

10. 同上, pp.136-137

つかみどころのない強い情動にかたちを与えて定着させ、その緊張を解消させるとともに、そうした不快な経験を他者と分かち合う術を与えてくれるものであることが分かる。

鷺田清一も、苦痛の声を聴き取るべき理由について、次のように語っている。「塞いでいるとき、打ちのめされているとき、陥没しているとき、その苦痛、苦悶について語るということは、それじたいが痛いものである。……が、それでも、痛みのなかにあるそのひとから痛みの声は聞こえてこないがゆえにそれは聴き取られねばならないとすれば、その理由はどこにあるのか。呑み込まれる言葉、それがひとの前でこぼれ落ちてくるまでには、気の遠くなるような過程がある。その過程をくぐり抜けて、それがさらに痛みを加重するものであってもそれでも聴き取られなければならないのは、自分の痛みについて語るということが、その痛みへのじぶんのかかわりを多重化し、痛みのなかに陥没していたじぶんに距離を置こうとしはじめることだからだ。陥没じたいに距離をとる、この能動性の芽というべきものがそこに現れようとしているからだ」¹¹。経験を受けとめなおす主体が形成されるのは、表出困難なことばにそれでも耳を傾けようとする他者がそこにいて、その人に向かって切れ切れのことばを紡ぎだそうとするそのときなのである。

田中智志は、ことばが現前性からの離脱の過程でリアリティを剥奪される様を指摘した上で、他者と触れあう力を取り戻す可能性について以下のように論じている。「言葉は、その意義が生まれた具体的な場所から遠ざかるとき、しだいに表象に変わっていく。すなわち、脱文脈化し、命題・言明に変わっていく。……しかし、言葉は、人の生と一体であることもある。たとえば、いじめに苦しんでいる子どもは、多くの場合、自分のことを本当に気遣ってくれるだれかに『かわいそうねえ』と同情されて、はじめて泣き出す。それは、他者への言葉が自分の自分への言葉となるときである。自分の境遇が言葉になるとき、すなわち自分が言葉と一体になるとき、自分の境遇が切実な意味として実感される。言葉は、それが人の心をふるわすとき、人の生と分かちがたいものとなる」¹²。他者へのことばが自分の自分へのことばになる可能性について、青木省三の紹介する事例にも目を向けておきたい。「ここである幼い子供の話をしよう。その幼児は、言葉の遅れを持ち、時に突発的な乱暴をしたりしていた。母親が大好きだったが、その気持ちをうまく表現できず、自分の中で気持ちがかみ合っていないようであった。三歳を過ぎた頃だろうか。その子が『おかあさーん』と言えるようになった。その頃から、氷が溶けるように、その子は穏やかになり、母親に甘えるようになった。『おかあさーん』と言う言葉が甘え・甘えられるという関係を、具体的で確かなものにした。もちろん下地として母親が子供に愛情を注いでいたということと、子供が母親を求めていたということがあったが、それだけでなく、言葉が母子の関係をより一層親密なものとする、大切なツールであることを実感した。言葉が親密さを育む、という良循環が

11. 鷺田清一・河合隼雄 (2003) : 臨床とことば, p.209.

12. 田中智志 (2012) : 教育臨床学 〈生きる〉を学ぶ, 高陵社書店, p.139.

できることがある」¹³。子どもは、愛する母への呼びかけのことばを獲得することによって、不快な情動に翻弄され、もてあましていた自分の存在を母に委ねることができるようになった。ことばは愛の対象に向けて志向の統合をもたらすとともに、愛する者との関係を再編する力を持つのである。ここで「おかあさん」とは一般名詞ではない。かけがえのないあなたをかけがえのないあなたとして目がけることを可能にする呼びかけのことばである。そのことばを手に入れて、主体は再編され、新たに立ち上がる。

ことばにおける自由

私たちの経験のすべてはことばによって媒介されていながら、なおも私たちはことばを探し、ことばを交わし合おうとしている。ことばを学ぶということは、他者から呼びかけられ、他者が語るのを聞くことから始まる。しかしそれは、既存のフレーズをストックした上で、状況にあわせてそれらのうちの一つを取り出すことではない。今井むつみが述べるように、「ことばの意味は単語単体で存在するのではなく、関係する意味を持った単語群の相対的な関係で決まる」¹⁴ため、ことばを学ぶ者は、「システムの要素を学習しながら、同時にシステムの仕組みを探し出そうとする。……要素とシステムはつねに連動し行きつ戻りつしながら互いに互いを引っ張り上げ、成長させている」¹⁵。具体的に語り出されることばは、常にこのような運動の途上にある。ことばは一回限り使用されるものではない。普遍性と共通性をもったものとして、個々別々の状況でそのつど運用されていく。ことばの組み合わせは多様であり、私たちにはことばを新たに紡ぎ出す力が与えられているのである。

ことばを新たに紡ぎだすことは、ことばにおける自由の可能性の証しだと言えよう。しかしその自由は、最初に何を語るべきかを意志し、次にそのためにどんな表現が適切かを考え、しかる後に実際にそのことばを発音するといった形で実現されるものではない。熊野純彦が、メルロ＝ポンティに仮託して語っているように、「私はふつうむしろ、なにかを語ろうとするときすでに、なにかことばを口に出してしまっている。口に出されたことばは、それ自体としてなにかしらの意味をもっており、ことばのその意味がさらに意味を分泌するがままに、ことばがことばをつなぎ、つぎのことばを生みだしてゆく。いったん口に出されたことばは取りもどしようがなく、ことばそのものの、いわば生理にしたがって、私はつぎつぎとことばを紡ぎだしていくことになるのではないだろうか。なにごとかを表現するために、私が、いちいちことばをえらび、そのことばに意味をむすびつけ、表現することを意図

13. 青木省三 (2012) : わたしの中の発達障害, ちくまプリマー新書, p.76.

14. 今井むつみ (2013) : ことばの発達の謎を解く, ちくまプリマー新書, p.185

15. 同上, p.179

しなければならないならば、私はまずそれぞれの語をこころのなかに思いうかべ、『表象』しなければならない。だが、メルロ＝ポンティがそう言っているように、私の身体を動かすために、じぶんの身体を表象する必要がないのとおなじことで、『私が語を知り、発音するためには、語を表象する必要はなく、この語の分節的で音声的な特徴を、私の身体の可能な使いかたのひとつ、さまざまな転調のひとつとして所有していれば、それで十分である』。その意味で、ことばを語ることは身体の使用法のひとつである。手が上がるように、ことばが語られるのである。ことばは、だから、なによりもまず、身体の所作、つまり身ぶりである¹⁶。ことばの自由とは、純粹意志のアプリオリ性によって保証されるものではなく、むしろ身ぶりの自在さとしてそのつど経験的に獲得されるべきものだと言えよう。

ことばで相手に触れる

ことばの場合、音楽のように対位法を奏することは困難である。ひとが発声するとき、一度に一つの音を出すことしかできないため、ことばは一本の線をなすように語られていく。ことばを語るとき、語られたことばに引き寄せられるようにして、続くことばが喚起される。その際、適切な語彙を選択するには、パラディグマティックな側面とシンタグマティックな側面とが同時に考慮される必要がある。しかも文法にかなって、内容的にも陳腐でなく、それでいて聞いている人すべてに理解可能なように語ることは至難の業である。身体的な理由で発声に困難があり、しかも正しく語るように監視されているような状況下においては、言語運用の自在さは期待しにくい。竹内敏晴は、自身の経験を振り返り、次のように述べている。「わたしに限らず、ことばの不自由なものは、からだの内に動くものを、なんとかことばにしようとあがく。やっと辿りつくことばは、時にとてつもない、他人には意味不明の語句だったりする。発したことばが通じない、と気づいた時の狼狽、苦しさ、自己への鞭打ち。もう一ぺん、ことばの探索、他人に分かるようなことばを。そしておずおずと発してみたことばが、相手に受け入れられ、相手の表情が、こちらへ向けて身構えているからだ全体が、ふっと変わり始めたときの喜び。これがことばの不自由なものにとっての『ことば』だ。それは存在そのものの表現であり、からだ全体での呼びかけだ。ただ、相手にじかにふれることを目指すだけだ¹⁷。からだ全体でしぼりだしたことばが相手に届いたという実感は、世界の刷新として受け止められる。「わたしは『快くなっていく』喜びは知っている。それは全身の統一感、躍動感の目覚めである。生来の耳だれと痛みが新葉の投与によって止まり、音が聞こえ始めた時期がそれであり、四十歳を過ぎて声が明確に出、『ことばが劈かれ』た時が

16. 熊野純彦 (2005) :メルロ＝ポンティー-哲学者は詩人でありうるか?, NHK 出版, pp.66-67

17. 竹内敏晴 (1999) :癒える力, 晶文社, pp.12-13.

そうであり、また、生まれて初めて音楽の美しさがからだに流れ入って来たと感じた瞬間もそうである。仮にこれを『癒え』と呼ぶとすれば、癒えるとは、実は今まで闇に閉ざされていた広大な世界が開け、それに向かいあう新しい自分の非力さに愕然とすることだと言っていい¹⁸。ことばは、主体の再編を促すことによって世界を新たな仕方を開き、他者に触れることを可能にするのである。

だが、その同じことばは、触れあうことを拒絶する道具と化すこともできる。中井久夫は、反響言語の例を挙げている。「伝達拒否の最も追いつめられた形として、反響言語がある。反響言語というのは、こちらの言ったことを患者がそのまま反復することだが、これは見事な伝達拒否である¹⁹。ここまで極端ではなくとも、触れ合いを拒否するためにことばが用いられるのは日常茶飯事である。ことばが劈かれるという経験について語った竹内敏晴は、同時に次のようにも述べていた。「一般の市民生活者いわゆる健常者の会話は、距離を測り、迂回する。裏があるから表がある。相手を支配するための策略を計算する。相手を傷つけないための思ひばかり、という名目で自己防衛する礼儀作法のきまり文句と身ぶりがある。ことばの不自由なものが必死で発する声とことばは、礼儀正しく受け止められ、防壁外で処理されて、相手のからだには届かない²⁰。ことばが相手を自分の懐に入りこませまいとする防御の道具として用いられるのではなく、自分のことばが相手に届き相手のことばが自分に触れるためには、具体的に何が必要だろうか。

冗長性の意義

平田オリザは「冗長率」ということばを紹介し、一つの文章に意味伝達とは関係のない無駄な言葉がどれだけ含まれているかを数値で表したものと規定した上で、一つの問いを投げかけている。「もっとも冗長率が高いのは、どれだろう。当然、多くの方は『会話』だと考える。『無駄話』というくらいだから、親しい人同士のおしゃべりが、冗長率が高いだろうと感じる。しかし、『会話』は、内容はたしかに冗長かもしれないが、冗長率自体は高くならない。お互いが知り合いだと、余計なことはあまり喋らない。……実は、もっとも冗長率が高くなるのは、『対話』なのだ。対話は、異なる価値観を摺りあわせていく行為だから、最初はどうしても当たり障りのないところから入っていく。腹の探り合いも起こる。『えーと、まあ、そうおっしゃるところもわからないでもないですが、ここは一つどうでしょうか、別の、たとえば、こういった見方もあるんじゃないかと……』とここまで、何一つ語っていない

18. 同上, p.175

19. 中井久夫 (2012): 「伝える」ことと「伝わる」こと, ちくま学芸文庫, p.135.

20. 竹内敏晴 (1999): 癒える力, 晶文社, p.13.

い。冗長率は圧倒的に高くなる」²¹。平田オリザによれば、冗長であることは、無駄なことのようだが、決してそうではない。その証拠に、語りのうまい人とは、冗長さを排して要点をスパッと語る人というより、むしろ冗長度を適宜コントロールして、相手を話のなかに引き込んだり、込み入った話でも無理なく理解してもらえるように回線を多重にして情報を伝えたりする工夫のできる人のことを指す。

山内志朗が指摘するように、「情報効率と情報の受容とは、途中までは比例しても、一定の限界を超えると、負の相関関係に立つようになります。できるだけ短い時間にできるだけ多くの情報を詰め込むことは、シャノン＝ウィーバー流の情報理論では、効率を上げ、冗長性を下げることになりそうですが、対人的コミュニケーションではそういったことは起こらず、逆に『情報効率』が上がるほど、誤解が増え、効率は下がることも起きるのです。ここでも『急がば回れ』が当てはまります」²²。表現に偏差が生じ、通常では誤謬と見なされる場合でも、十分な冗長性があれば、偏差は新しい表現として理解可能になる。冗長性は誤謬の自己訂正の可能性を与えるだけでなく、新しい言語表現の可能性をも開くものなのである。

田中智志も、冗長性を創造的なコミュニケーションの特質として捉えている。「冗長性とは、確実で親密な関係におけるコミュニケーションの特徴である。それは、親しい間柄である私とあなたのあいだで、微妙で精妙な意味了解の同調によって可能になるもので、相手の言外のニュアンスが汲み取れるようになることによって相手を重視することである。いいかえれば、私とあなたとの間で冗談が通じるように、二人のあそび心が同調していることである。冗長性のもっとも重要な機能は、自他の思わぬ失敗を吸収し、なかったことにすることである。たとえば、マラプロピズム（誤った言葉の意味疎通）のように、いいまちがえても意味が伝わることである。その意味で、冗長性はコミュニケーションの緩衝装置である。普通の車のハンドルに『あそび』があるように、人間関係にも冗長性という『あそび』がある。この冗長性の有無（多寡）によって、人間関係の様態（モード）が決定される。冗長性が十分な場合、人間関係は、思うところをいいあえる個人的なつきあいになるが、冗長性が乏しい場合、人間関係は、愛想笑いを浮かべながら、本心をいっさい隠した事務的なつきあいになる」²³。田中はまた、別のところでは、冗長性を次のように説明している。「『ボケと突っ込み』のように、自分と他者とのあいだでこのくらいの本音（つまりメタレベルのメッセージ）をぶつけても、相手が嬉々として応答してくれるはずだという、予期が相互に一致することである。こうした予期の一致によって、あふれる情報のなかで、どうでもいい話で盛り上がること、すなわち、メッセージではなく、コミュニケーションそのものに夢中になるという状態が生み出されていく」²⁴。今日、冗長性の貧困化が進むなかで、意味同調を求めるあまり、

21. 平田オリザ（2012）：わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か、講談社現代新書，p.106-107

22. 山内志朗（2007）：〈冗長さ〉が大切です，双書哲学塾，岩波書店，p.135.

23. 田中智志（2005）：臨床哲学がわかる事典，pp.96-97.

24. 田中智志（2002）：他者の喪失から感受へ—近代の教育装置を超えて，勁草書房，p.120.

いじめのような排他的現象が生じているのだという。互恵的で対面的な冗長さの高いコミュニケーションの習慣こそが求められているのである。「豊長なシステムは、整合性や合理性において欠けるようなところがあるとしても、全体として安定していることが多いのである。ダブルバインドが示しているのは、豊長性を欠いてしまった場面の軌轢なのです」²⁵。

冗長性を「話の継ぎ穂」という視点から考察しているのは、中井久夫である。「あいづちなんかは、情報は伝えていないが、相手とこちらをつなぐような機能をしている。『あの一』は次の話へと話をつなげる。そこで、私は言語のこういう面に、『話の継ぎ穂』という名をつけたい。……継ぎ穂は、次の行動なり返事なり文章なりを引き出して行くオペレーター(演算子)と考えるとよい。継ぎ穂部分は、必ずトーンを伴っている。……親しい人同士の会話は、語尾という相手とつなぐ機能をもっている部分のみこまれたようにあいまいに語られる。一方、相手も、そこは分かったということでもう次の言葉がその上に重ねられる。そう、会話とは、二人で一つの文章をつくり上げることをめざすのだ」²⁶。何を言おうとするかその全体を硬くにらみすえながら語ることは、継ぎ穂を衰弱させ、その結果、話をふくらまそうとしても縮まってしまう。反対に、相手との関係に身を任せることのできるような柔軟な支えが2人のあいだに感じ取られるならば、話の全体はぼんやりのままでも、ことばは豊かに紡ぎだされていく。

相手との関係をことばのうちに畳み込みながらそのことばを相手への祝福として送り返すこと、知っている側が知らない側に知識を伝達するというよりも二人が会話を通して新たなことばを育み、それを共にたのしむことができること、不在を不在として意識させることばを嘘や幻想をふりまくためではなく悲しみと希望を分かち合うために用いること、冗長性を許し合う関係のうちには、ことばのこうした創造的な可能性が潜んでいると言えよう。ことばは他者に触れることによって同時に自己を生かすものとなるのである。

25. 山内志朗 (2007) : 〈豊長さ〉が大切です, 双書哲学塾, 岩波書店, p.135.

26. 中井久夫 (2012) : 「伝える」ことと「伝わる」こと, ちくま学芸文庫, pp.140-143.